



お蔭 (うしろより) あなた、今帰ってよ。兄さん。

早瀬 ああ。

お蔭 私は……こつちよ。

早瀬 おお早かったな。

お蔭 いいえ、お待遠さま。……私、何だか、案じられて気が急いて、あなた、ちょっと顔を見せて頂戴(背ける顔を目にして縛る) ああ(嬉しそうに) 久しぶりで逢ったようよ。(さし覗く) どうしたの。やはり屈託(くつとく) そうな顔をして。——こうやって一所に來たのは嬉しいけれど、しつけない事して、——天神様のお傍はよし、ここを離れて途中でまた、魔(ま)がさすといけません。急いで電車で帰りましょう。

早瀬 お前、せいせい云って、ちと休むがいい。

お蔭 もうたくさん。

早瀬 おまいりをして來たかい。

お蔭 ええ、仲町の角から、(軽く合掌す) 手を合せて。

早瀬 何と云ってさ。

お蔭 まあ、そんな事。

早瀬 聞きたいんだよ。

お蔭 ええ、話すわ。あなたにご両親はありません、そのご両親とも、お主とも思います。あなたの大事なお師匠さま、真砂町の先生、奥様、お二方を第一に、ご機嫌よう、お達者なよう。そして、可愛いお嬢さんが、決して決して河野なんかとご縁組(えんぐみ) ないませんよう。

早瀬 それから。

お蔭 それから？

早瀬 それから、……

お蔭 だって、あとは分ってるじゃありませんかね。ほほほほ。
(ともに寂しく笑う) ははは、で、何を買って來たんだい、買いものは。



お蔭 (無邪気ににこにこしつつ) いいもの、……でも、お

前さんには気に入らないものの、それでも、気に入らせないじゃおかないもの、嬉しいもの、憎いもの、ちよつと極りの悪いもの。

早瀬 何だよ、何だよ。

お蔭 ああ、悪かった。……坊やお土産を待っていた

んだよ。そんなら、何か買って上げりゃよかった。

……堪忍おしよ。いい児だねえ。

早瀬 いいから、何を買ったんだよ。

お蔭 見せましょうか、叱らない？

早瀬 ………

お蔭 叱ったって、もう買ったんだから構わない、(風呂敷

より紙つつみを出す) 髷形よ、円髷(まるまげ。椅

円形の型を入れて丸く結う既婚者の髪型) の。仲町に評判な内があるんですわ。

早瀬 髷形を、お蔭。(思わずそのつつみに手を掛く) 俺の位牌でも買やいいのに。

お蔭 まあ、お位牌はちゃんと飾って、あなたのおふた親に、お気に入らないかも知れないけれど、私や、私ばかりは嫁の気で、届かぬながら、朝晩おもりをしていますわ。

早瀬 樹から落ちた俺の身体だ。……優しい嫁の孝行で、はじめて戒名が出来たくらいだ。俺は勘当されたって。

……何を前、両親がお前に不足があるものか。——位牌と云うのは俺の位牌だ。——

お蔭 ええ。

早瀬 お蔭、もう俺や死んだ気になって、お前に話したい事がある。

お蔭 (聞くと齊しく慌しく両手にて両方の耳を蔽う。)

早瀬 ちよつと、もう一度掛けてくれ。





お蔭 (ものも言わず、頭をふる。)

早瀬 よ。(と胸に手を当て、おそうとして、火に触れたるがごとく、ツト手を引く) 死ぬ気になって、と聞いたばかりで、動悸はどうだ、震えている。稲妻を浴びせたように……可哀相に……チョッいつそ二人で巡礼でも。……いやいや先生に誓った上は。——ええ、俺は困った。どうしよう。(倒るるがごとくベンチにうつむく。)

お蔭 (見て、優しく擦寄る) 聞かして下さい、聞かして下さい、私や心配で身体がすぐむ。(と忙しく) 早く聞かして下さいな。(と静に云う。)

早瀬 俺が死んだと思って聞けよ。

お蔭 厭。(烈しく再び耳を庄う) 何を聞くのか知らないけれど、貴下この二三日の様子じゃ、雷様より私は怖いよ。

早瀬 (肩に手を置く) やあ、ほんとに、わなわな震えて。

お蔭 ええ、たとい弱くって震えても、あなたの身替りに死ねども云うんなら、喜んで聞いてあげます。あなたが死んだつもりだなんて、私や死ぬまで聞きませんよ。

早瀬 おお、お前も殺さん、俺も死なない、が聞いてくれ。

お蔭 そんなら、……でも、恐いから、目を瞑いで。

早瀬 お蔭。

お蔭 ……

早瀬 俺とこれッきり別れるんだ。

お蔭 ええ。

早瀬 思切って別れてくれ。

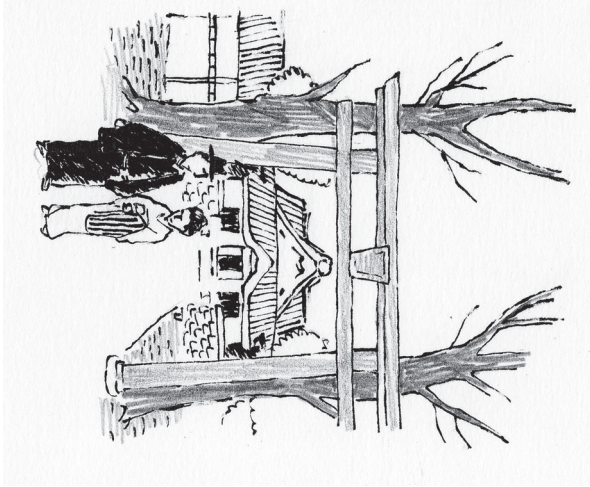
お蔭 早瀬さん。

早瀬 ……

お蔭 串戯じゃ、——あなた、なさそうねえ。

早瀬 洒落や串戯で、こ、こんな事が。俺は夢になれと思っている。

お蔭 ……



お蔭
ほんとうなのねえ。

早瀬 俺があやまる、頭を下げるよ。

お蔭 切れるの別れるのって、そんな事は、芸者の時に云うものよ。……私にや死ねと云って下さい。蔭には枯れる、とおっしゃいましたな。

早瀬 お蔭、お蔭、俺は決して薄情じゃない。

お蔭 ええ、薄情とは思いません。

早瀬 誓ってお前を厭きはしない。

お蔭 ええ、厭かれて堪るもんですか。



早瀬

こつちを向いて、まあ、聞きなよ。他に何も鬱々事はない、この二三日、顔を色を怪まれる、屈託はこの事だ。今も言おう、この時言おう、口へ出そうと思つても、朝、目を覚せば俺より前に、台所でおかかを掻く音、夜寝る時は俺よりあとに、あかりの下で針仕事。心配そうに煙管を支いて、考えると見ればお菜の献立、味噌汁で豆腐を買う後姿を見るにつけ、位牌の前へお茶湯して、合せる手を見るにつけ、咽喉を切つても、胸を裂いても、唇を破つても、分れてくれとは言えなかつた。先刻も先刻、今も今、優しいこと、嬉しいこと、可愛いことを聞くにつけ、云おう云おうと胸を衝くのは、罪も報いも無いものを背後からだまし打に、岩か玄翁でその身体を打砕くような思いがして、俺は冷汗に血が交つた。な、こんな思をするんだもの、よくせきな事だと断念めて、きれると承知してくんな。・・・お前に、そんなに拗ねられては、俺は生きてる空はない。

お蔭

ですから、死ねとおっしゃいよ。切れろ、別れろ、と云うから厭なの。死ねなら、あい、と云いますわ。私や生命は惜くはない。

早瀬

さあ、その生命に、俺の生命を、二つ合せても足りないほどな、大事な方を知っているか。お前が神仏を念ずるにも、まず第一に拝むと云つた、その言葉が嘘でなければ、言わずとも分るだろう。そのお方のいつけなんだ。

お蔭

(消ゆるがごとく崩折れる)ええ、それじゃ、あなたの心でなく、別れろ、とおっしゃるのは、真砂町の先生の。(と茫然とす。)

早瀬

己は死ぬにも死なれない。(身を悶ゆ。)

お蔭

(はっと泣いて、早瀬に縋る。)